

認知症に溺れて

函館市医師会
共愛会病院

石井 敏明

平成5年6月のある朝、木戸浦隆一函館市長（故人）から招呼を受けた私は、曇り空なのに膨らんだ緑が明るい街路樹の間を縫うようにして、保健所のある五稜郭町から市役所のある東雲町へ車を走らせた。

その日、私が市長より受けた助言は、行政の立場で、医師として老人の痴呆に役立ってみないかということであった。

私は長い時を置かず、「早期発見から早期対応まで」を惹句として、2週に1回、保健所において市民を対象とした痴呆のスクリーニング外来を事業化し、年2回、市内の医療福祉従事者80人に1コース6日間の認知症をテーマとした研修会を実施し（この事業は8年間続いた）、保健所に事務局を置く医療、福祉関係者、痴呆性老人を介護する家族等を会員とした道南老人性痴呆懇話会を立ち上げた。

相前後して、保健所の機構の中に当時としては多分、全国的にもほとんど例を見なかったであろう痴呆対策係を新設し、併せて官公庁、警察、報道機関、交通機関、各種商店などの関係機関等から成る徘徊老人支援のためのSOSネットワークを構築した。

短期間でのこれら一連の事業実施に当たって、木戸浦市長の理解と貴重な助力があったことは言を俟たない。

平成11年11月のある夕刻、私は函館市内のごく普通の居酒屋の一室に小さなテーブルを挟んで小澤勲氏（故人）と対坐していた。

面識のない私からの全く私的な一通の手紙と一度の電話のみで、氏は打ち合わせた日時に、一人で、初めての函館の、しかも何の特徴も無い居酒屋に来てくれたのであった。

氏は痴呆症の診断学とともに介護学にも造詣が深く、『痴呆老人からみた世界』（岩崎学術出版社）や『痴呆を生きるということ』（岩波新書）などの著者であり、老人保健施設に長い間勤務し、後には、痴呆性老人の介護をテーマとした映画の製作アドバイザーとして参加したほど、医療と介護の橋渡しを実践した先駆者であり、第一人者であった。

私は氏の著書を何度も読み返し、要点をまとめたノートを手元に置いていたが、古びたそのノートを現在も手元に置いてある。

その夜、氏は痴呆性老人と言われる大部分の人たちには確かな病感があり、それと闘いながら生きて

いること、周辺症状（近年、BPSDと言われることが多いが）はその人の人格（性格プラス人生経験）とライフイベント（多くは喪失体験）が基盤となり、日常的な小さな出来事が直接的なきっかけになって発現し、それらのほとんどは介護者の接し方によって軽快もし増悪もするもので、抗精神病薬等による薬物療法が時には禁忌でさえあることなどを、氏の経験を交えながら、静かに、しかし熱く語られた。

（ここまでは、当時、「認知症」が「痴呆」と言い習わされていたため、それに従った）

平成20年、その頃、私が勤務していた亀田北病院（函館市）に相談部門に加え、外来と病棟を専門化させた「認知症センター」を開設し、その後、北海道で最初の地域型認知症疾患医療センターとして国の指定を受け、現在もその役割を果たしていることを喜ばしくも誇らしく思っている。

平成23年4月、縁あって函館共愛会病院に勤務することとなり、同年6月、福島安義理事長の理解を得て「もの忘れ外来」を開設させていただいたが、そのことを噂に聞いてか、以前私が担当していた認知症を病む人たちの幾人かが家族や自らの希望で受診してくれた。

その一人で、意味性認知症を病むヤエさんが、今日も一つおいて隣の町から大きなベッドに寝かせられ、介護職員と既に高齢期に入った娘さんに付き添われて私の外来を訪れた。

短い間隔での受診は必要ないのであるが、昨年、自力による十分な摂食が難しくなったため、数か月をかけた相談の末、他科において胃瘻を造設したので、その具合を確認するために来院し、ついでに寄ってくるのだ。

もの忘れ外来の狭い診察室にヤエさんの大きなベッドは入れないため、いつもドアの前での診察になってしまう。

娘さんはその間のヤエさんの小さな変化にも良く気が付いていて、詳しく説明してくれるが、その上で、最近では眠っているような時間がさらに増えたこと、朝の声掛けに対しては以前と変わらず、首をもたげて声の主を探す仕種をすること、鼻の穴に軽く指を差し入れてやると目元を緩ませることなどを嬉しそうに話してくれた。

私がヤエさんの手首と肘の関節が固くなっていないことを確かめ、「ヤエさん」と調子を付けて呼び掛けながら両の掌で頬を挟むようにすると、ヤエさんは余程のことがない限り、うっすらと目を開いて私を見てくれるのである。

約十分間のヤエさんの診察はこのようにして終わる。